

露草に 知れぬ人こそ 恋しけれ

浅き縁えにしの 里の朝霧

令和四年八月二十九日 大中臣正比呂



つきくさ ころも す

月草に 衣は摺らむ朝露に濡れての後は 移ろひぬとも

この、万葉集にもある露草の歌は、容易に読めるが意味が確定できない。色々と想像を巡らせるのだ。連日の猛暑の後、今朝は涼しい。

露草は「夏の終わり」に咲くが、その言葉自体が「恋の終わり」を表している。

一方、紫草むらさきくさは長唄「藤娘」に出てくる情熱が保たれている色と云うべきか。